

5. 特に問題となった病害虫の発生状況、原因解析及び防除対策

(1) 水稻関係

対象作物：水稻

病害虫名：トビイロウンカ

発生程度：早期水稻 やや少

普通期水稻：少

1. 飛来

- ・予察灯(諫早市)において6月30日に飛来を初確認。

2. 発生～増殖

- ・早期水稻では期間を通してやや少ない発生で推移した。
- ・普通期水稻では平年より少ない発生であり、圃場での増殖は見られなかった。

3. 予察調査と情報発信

- ・予察灯(4地点)。ネットトラップ(1地点)。
- ・巡回調査月2回(2～3半旬及び5～6半旬、県内概ね90～120圃場)。
- ・予察灯やネットトラップデータは適宜最新の情報をHP上で提供した。

4. 防除指導

- ・県央地域や県北地域の防除検討会に直接参加し、防除指導を行った。
- ・各地域では農協、普及センターを中心に防除指導がなされた。
- ・8月上中旬、8月下旬、9月上旬の3回の基幹防除を指導した。

5. 実際の防除

- ・基本的に8月上中旬、8月下旬、9月上旬の3回防除がなされた。
- ・防除薬剤は8月上中旬がブプロフェジン剤、8月下旬及び9月上旬がシラフルオフェン剤、エトフェンプロックス剤、ジノテフラン剤主体。

6. 坪枯れ

- ・5月下旬～6月上旬植の圃場において坪枯れが見られたが、少発生であった。主要飛来期に箱剤の残効がきれていたことや8月上旬の防除を抜いたことが原因と考えられる。

7. 問題となった点

- ・圃場の見回り不徹底による防除の手遅れや基幹防除の省略

8. 今後の課題

- ・生産者段階における圃場単位での発生状況把握と早期防除徹底
- ・株元に薬剤が十分付着するような薬剤散布の徹底
- ・主要防除薬剤に対する薬剤感受性の把握

対象作物：水稻

病害虫名：コブノメイガ

発生程度：やや少

< 発生経過と原因解析 >

- ・6月3半旬に初誘殺を確認し、主な飛来は6月6半旬であった。やや少ない飛来量であった。

- ・早期水稻では、食害株率、10 m²あたり成虫数ともに平年よりやや少なく推移した。
- ・普通期水稻では食害株率は平年よりやや少なく、10 m²あたり成虫数は平年並であった。8月中旬以降曇雨天が続いたため、窒素が効いた圃場では出穂以降食害株率が増加した。

< 防除対策等対応内容 >

- ・6月27日に防除情報を発表した。
- ・普通期水稻では、8月2～3半旬に防除が実施された。

< 問題となった点 >

- ・飛来が少なかったことで8月上旬の基幹防除を抜いた圃場で第2世代幼虫による被害が見られた。

< 今後の課題 >

- ・箱施薬剤の的確な使用。

対象作物：水稻

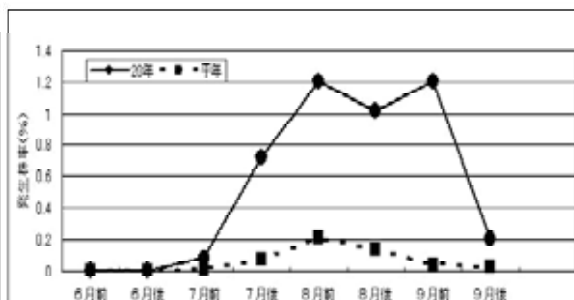
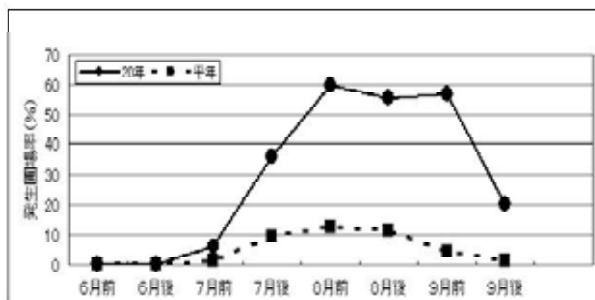
病害虫名：縞葉枯病 ヒメトビウンカ

発生程度：多

< 発生経過と原因解析 >

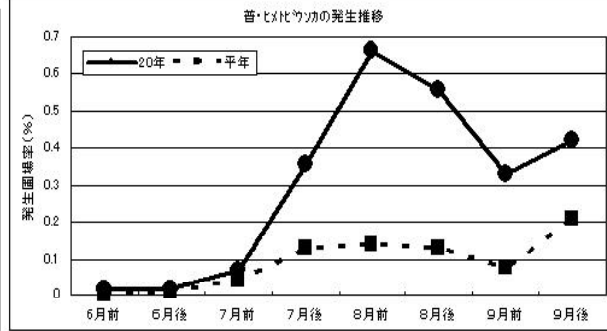
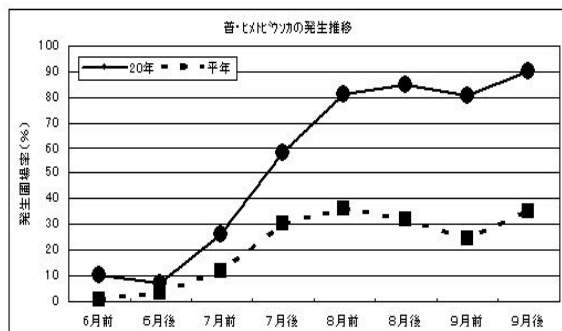
縞葉枯病

- ・早期水稻では、6月4半旬に発生を認め、発生圃場率も高く推移し、多い発生であった。発生程度は少程度であったが、一部圃場では出すくみがみられた。
- ・普通期水稻では、6月5半旬に発生を認め、7月上旬以降多発生で推移した。



ヒメトビウンカ

- ・越冬世代虫、第1世代虫ともに生息量が非常に多かった。
- ・早期水稻では5月6半旬に発生を認め、多い発生で推移した。
- ・普通期水稻で6月2半旬に発生を認め、非常に多い発生で推移した。
- ・6月5日のネットトラップでヒメトビウンカが63頭捕獲され、6月では過去10年間で1日あたりの捕獲量としては最も多かった。



< 防除対策等対応内容 >

- ・ヒメトビウンカの保毒率検定の実施とその結果に基づく情報。
(防除情報4月9日、注意報6月16日)。
- ・ヒメトビウンカと縞葉枯病の発生状況調査結果に基づく情報。
(防除情報7月15日、技術情報8月8日、防除情報8月18日)
- ・箱施薬剤の使用
- ・本田防除は8月上中旬、8月下旬～9月上旬でセジロウンカ、トビイロウンカとの同時防除

< 問題となった点 >

- ・平成16年以降ヒメトビウンカの保毒虫率が高く、縞葉枯病也多発傾向で推移している。
- ・5月下旬～6月上旬に移植される地域での発生が多かった。イミダクロプリド箱剤施用地区で発生株率が50%を超える激発圃場も認められた。
- ・発病株の抜き取り不徹底

< 今後の課題 >

- ・ウイルス保毒虫率の把握
- ・主要薬剤に対する薬剤感受性の把握
- ・発病株の抜き取り徹底
- ・冬季～春季の耕起の徹底
- ・小麦作付け地域でのヒメトビウンカの防除実施

対象作物：水稻

病害虫名：紋枯病

発生程度：早期 やや少

普通期 やや多

< 発生経過と原因解析 >

- ・早期水稻では、7月3半旬と平年より遅く発生を認め、平年よりやや少ない発生であった。
- ・普通期水稻では7月5半旬に発生を認め平年より遅く発生を認め、8月以降やや多い発生で推移した。
- ・一部圃場では上位葉鞘への進展がみられた。

< 防除対策等対応内容 >

- ・早期水稻では7月上中旬(出穂期～穂揃い期)の薬剤防除徹底
- ・普通期水稻では8月上中旬(出穂2週間前)及び8月下旬～9月上旬(出穂～穂揃い期)の薬剤防除徹底。

< 問題となった点 >

- ・普通期水稻では茎数が平年よりやや多く、8月以降の気温が高かったため一部の多発圃場を中心に十分な防除効果があがらず上位葉鞘への進展が続いた。

< 今後の課題 >

- ・多発生圃場における体系的な防除（箱施薬剤＋本田防除）の実施

(2) 野菜関係

対象作物：キュウリ、メロン、トマト、ミニトマト

病虫害名：タバコナジラミ（バイオタイプQ）とトマト黄化葉巻病、
キュウリ・メロン退緑黄化病

発生程度：タバコナジラミ やや多（トマト、キュウリ）

トマト黄化葉巻病 やや多 キュウリ・メロン退緑黄化病

1. 発生経過と原因解析

(1) タバコナジラミ

- ・19年秋定植のトマト、キュウリでは定植初期から発生が多かった。例年どおり2、3月にかけて密度が低下したが、トマトでは4月以降再び増加し、平年を上回る密度になった（図）。

(2) トマト黄化葉巻病

- ・トマト、ミニトマトとも定植初期に発病株が散見される圃場が目立った。発生程度は地域や圃場により差が認められた。

(3) キュウリ・メロン退緑黄化病

- ・20年3月までに、島嶼部を除くほぼ全域で発生を確認した。
- ・促成キュウリでの発病は、2月以降認められた。

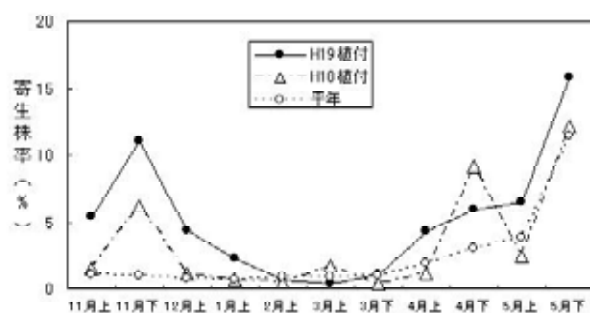


図 トマト コナジラミ類 寄生率の推移

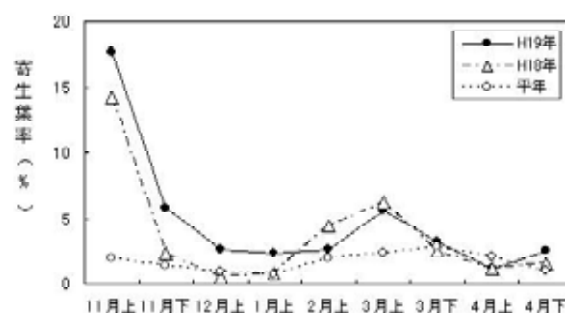


図 キュウリ コナジラミ類 寄生率の推移

2. 防除対策等対応内容

- ・関係機関との連携による地域ごとの発生状況調査。
- ・予察情報や研修会等における情報提供
 - 19年11月16日 防除情報（タバコナジラミ、トマト黄化葉巻病）
 - 20年2月15日 特殊報（キュウリ・メロン退緑黄化病）。
- ・20年度から苗トラップによる黄化葉巻病のモニタリングを開始。

3. 問題となった点

(1) タバコナジラミ

- ・アスパラガスでの発生が目立つが、有効薬剤が無く、防除に苦慮している。

(2) トマト黄化葉巻病

- ・一部、早い作型で多発圃場があり、周辺への感染源として懸念される。

(3) キュウリ・メロン退緑黄化病

- ・メロンでは果実品質(糖度)への影響が認められた。

4. 今後の課題

- ・夏～秋におけるタバココナジラミの発生量や媒介ウイルスの保毒率調査など、予察技術の確立。

対象作物: イチゴ

病害虫名: 炭疽病 (*Glomerella singulata*)

発生程度: 並

1. 発生経過と原因解析

- ・依頼診断で5月上旬(前年6月下旬)に初確認後、育苗期間を通じて各地で発生が見られたが、抜き取りや薬剤防除の徹底により、本病を検出した件数は少なかった。
- ・巡回調査では、6月下旬に発生を確認し、8月下旬に発生圃場率18.5%、発病株率0.5%と増加したが、育苗期間中の発生は平年並みで推移した。
- ・発生圃場では、6月中～下旬、7月中旬～下旬の降雨により感染がおり、7月～8月の高温で発病が進んだものと思われる。
- ・炭疽病に感受性の高い品種「さちのか」が70%を占めている。

2. 防除対策等対応内容

- ・予察情報等による情報提供(防除情報 6月20日)。
- ・薬剤防除体系モデルの提示。
- ・対策検討会の開催(全農県本部主催)。
- ・指導事項の重点化(ランナーの早期切り離し、長雨時に散布間隔を空けすぎない、梅雨明け後の全戸巡回による罹病株の早期発見および防除指導)。
- ・高設・雨よけ育苗施設、点滴かん水設備の導入推進。

3. 問題となった点

- ・ランナー切り離し時期に雨が続き、一部で作業が遅れた。

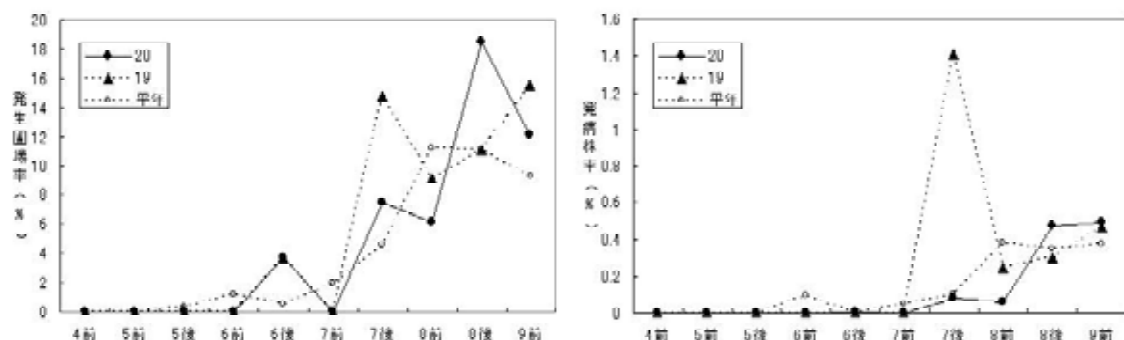


図 いちご育苗床における炭疽病 (*G.cingulata*) の発生推移 (巡回調査)
平年: H10～H19の平均値 (最大・小を除く)

4. 今後の課題

- ・伝染環を遮断するため、無病親株生産システムの確立。
- ・生産者や指導機関に対する育苗期の病徴判別能力の向上。
- ・新規有効薬剤の登録。

対象作物：キュウリ、メロン

病害虫名：黄化えそ病 (MYSV)

1. 発生経過と原因解析

- ・平成20年4月上旬に南島原市有家町の3月定植の施設栽培きゅうりにおいて、発生を初確認した。
- ・5月下旬に諫早市のきゅうりにおいても2戸の農家で発生を確認し、現在までの発生面積は52aである。
- ・メロンについては、現段階で発生を確認していない。

2. 防除対策等対応内容

- ・特殊報の発表(5月22日)。
- ・発生地区では現地検討会時に農家へ防除対策資料を配布。
- ・指導機関(普及センター、農協等)への注意喚起のため防除対策資料の配布(6月27日)

3. 問題となった点

- ・これまでアザミウマ類の発生があっても、直接的な被害が少なかったため防除対策の徹底がなされていなかった。
- ・きゅうりの周年栽培が行われており、作型間のハウスの空き期間が短いためアザミウマ類の防除対策が十分に行なえていない。

4. 今後の課題

- ・粒剤体系の導入。
- ・薬剤防除体系の検討。
- ・新規有効薬剤の登録。

対象作物：果樹全般

病害虫名：カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

発生程度：前半(7月以前)：少 後半(8月以降)やや多

飛来時期：前半(7月以前)：5月上旬 後半(8月以降)8月中旬頃(やや早)

発生経過

- ・チャバネアオカメムシの越冬量は平年より少なかった(表)。
(平成20年0.04頭/m²、平年0.4頭/m²)
- ・諫早市のフェロモントラップ誘殺量は、年間を通して少ない発生で推移した(図)。
- ・6月下旬に実施したヒノキきゅう果着生状況調査の結果、着生量は平年よりやや多く、7月下旬に実施したヒノキ樹上カメムシ類のピーティング調査の結

果、枝当たりの寄生頭数は2.1頭（平成1.2頭）で過去10年間で3番目に多かった。

- ・7月下旬に実施したヒノキきゅう果の口針鞘数の調査結果から、果樹園への飛来時期は9月中旬と予測された。
- ・現地では8月上旬頃から飛来が見られ、8月下旬から9月中旬にかけて飛来が多い状態が続いた。

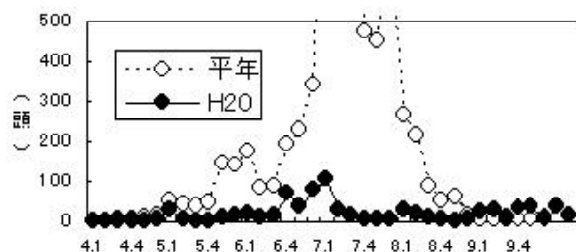


図 チョロネ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(線早:黄色)カメムシ(月・半旬)
※ 平均は平成15～19年の平均

表 越冬量調査およびピーティング調査の推移

	越冬量 (頭/㎡)	ヒノキ枝当たり寄生頭数		
		7月下旬	8月下旬	9月下旬
H20	0.04	2.1	1.7	0.6
H19	0.06	0.3	0.7	0.5
H18	1.59	3.0	0.2	0.1
H17	0.06	0.2	1.6	1.1
H16	0.82	0.6	0.1	0.0
H15	0.09	0.2	0.9	0.2
H14	1.25	2.8	0.1	0.0
H13	0.00	0.2	1.7	0.2
H12	0.48	1.3	0.5	1.3
H11	0.24	1.5	1.7	1.5
H10	0.26	1.4	0.4	1.4
平均	0.51	1.2	0.8	0.6

(原因解析)

- ・越冬量が少なかったため、前半の発生量は少なかったが、本年のヒノキきゅう果量が平年よりやや多かったため、当年世代の発生量が増加した。
- ・カメムシの果樹園への飛来が、口針鞘数から予測した飛来日より早くなった原因として、夏季の高温乾燥によりカメムシの吸汁活動が活発になりきゅう果の劣化が早くなった可能性がある。

(対応内容)

- ・越冬量調査の結果を受け、前半の発生が少ない旨の技術情報第3号を平成20年3月3日に発表した。
- また、当年世代虫の発生量や予測飛来日について8月7日に技術情報第1号を発表した。果樹園への飛来の増加をうけて9月12日に注意報第3号を発表した。

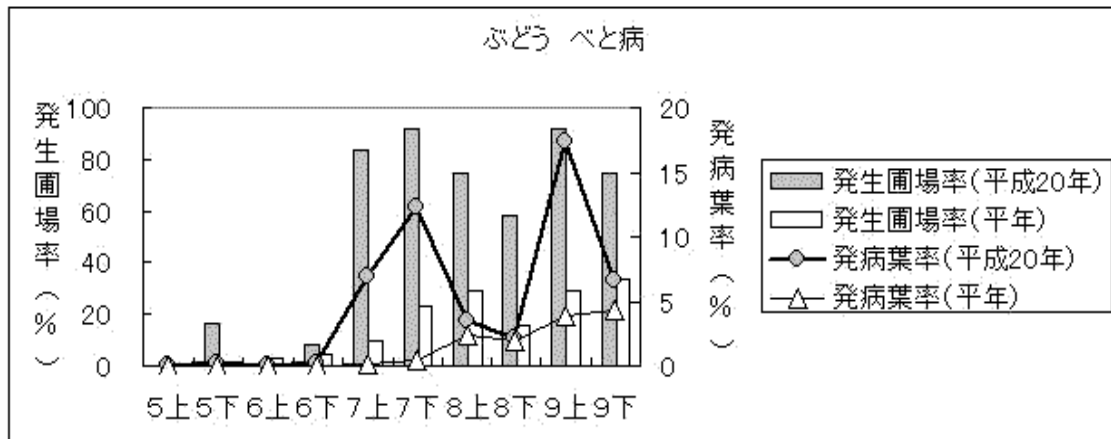
(問題となった点、今後の課題)

- ・口針鞘数による飛来予測日に比べ実際の飛来が早かった原因の解析が必要である。
- ・8月以降、カメムシ類の果樹園への飛来が増加したことを巡回調査や防除員の報告などで把握したが、県内4カ所に設置しているフェロモントラップでは誘殺量に大きな変化が見られず、実際の発生量とフェロモントラップ誘殺量に差が見られ、注意報の発表がやや遅くなった。

対象作物：ブドウ
 病害虫名：べと病
 発生程度：多

(発生経過)

- ・巡回調査での初確認は5月下旬で平年並であった。
- ・巡回調査では6月下旬までの発病葉率、発生圃場率ともに平年並であったが、7月上旬調査で発生が増加し、以降発生の多い状態が続いた。
- ・一部の圃場で葉の黄化などが見られた。



(原因解析)

- ・昨年の9月以降、べと病の発生が多かったため、圃場内の菌密度が高かったと思われる。
- ・梅雨明けは平年より早かったものの、5月、6月の降水量が多く、曇天の日が続いたため、本病の発生に好適であった。

(対応内容)

- ・7月15日に注意報第2号を発表し注意を呼びかけた。

対象作物：かんきつ
 病害虫名：かいよう病
 発生程度：並

(発生経過)

- ・3月上旬に実施した越冬病斑調査の結果、越冬病斑は平年並だった(発病葉率0.6%、平年0.6%)。
- ・巡回調査では、春葉で平年並の5月下旬に発生を認め、その後の発病葉率は平年並に推移した(図1)。
- ・果実では、平年よりやや遅い7月上旬に発生を認め、その後の発病果率は平年並に推移した(図2)。

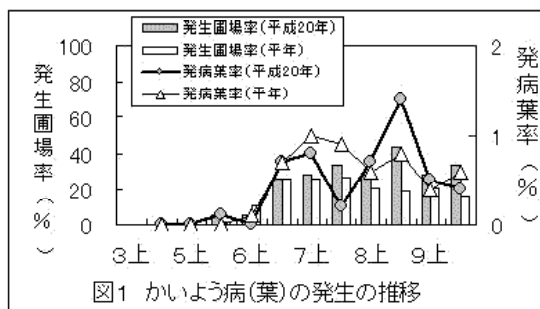


図1 かいよう病(葉)の発生の推移

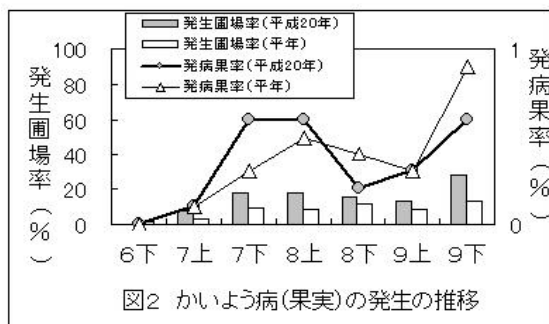


図2 かいよう病(果実)の発生の推移

(原因解析)

- ・越冬病斑が平年並であった。
- ・台風などの強風雨による被害が無かった。

(対応内容)

- ・夏季以降の台風襲来時の際にこれまで使用されてきたストレプトマイシン剤が失効したことから平成20年度かんきつ栽培暦検討会などで銅剤による初期防除を重視する方針を確認した。

(問題となった点)

- ・ストレプトマイシン剤のかんきつ登録が失効し、果実着生時に薬害の問題がなく、防除効果が高い薬剤がない。

(今後の課題)

- ・発芽期から幼果期までの防除の徹底
- ・防除効果が高い薬剤散布体系の確立
- ・防風樹の整備や発病枝葉のせん除など耕種的防除の徹底